

現代俳句文庫

62

# 坪内稔典句集Ⅱ



たんぽぽの  
ぽぽのあたりが  
火事ですよ

●収録作品

句集「百年の家」全

「人麻呂の手紙」抄

「ぽぽのあたり」抄

「月光の音」抄

●解説

浪川知子

足立剛夫

収録作品

『百年の家』全（平成五年一〇月刊）二五五句

『人麻呂の手紙』抄（平成六年八月刊）三五句

『ぼほのあたり』抄（平成一〇年七月刊）六七句

『月光の音』抄（平成一三年一二月刊）四三句

ふわふわと正月の雪焼却炉 『百年の家』全

からっぽの鳥籠がありお正月

コンビニを出て正月の牡丹雪

軒の影踏んでは跳んでは春着の子

せりなずなごぎようはこべら母縮む

ほとけのざすずなすずしろ父ちびる

松過ぎのポケットにありロツテガム

下萌や明治の母のいるごとし

傷光るバレンタインの日の崖も

蝶までの距離と言うべし春の泥

陽炎やアメリカ青春小説集

春の雪コーンフレークさわさわと

ほどほどに鳴らが浮かぶ梅見月

首すくめ古代の池の春の鴨

梅三分うさぎの糞のポロポロと

梅咲くや天に帰ると言うことも

友が来る紅梅の咲く日を踏んで

ワイプロのぬの字あたりに日脚伸ぶ

伊丹には鬼貫ありき春の雪

散らばって宇宙のひかり犬ふぐり

穴掘って穴に親しむ揚雲雀

春蘭や駆け落ちをして今ここに

春風や京都にひとつある用事

三月や京都の水をごくごくくと

花菜漬遠くの友のすこやかかに

三月や知らない人の片えくぼ

紅梅やえくぼの君は誰とだれ

三月や崩れて崖の匂いつつ

三月のサッカーチーム土手すべる

椿さしこの壺底のないような

春雷やか  
かの日の  
銀の耳飾り

河馬へ行く  
その道々の  
風車

三月や  
天心にいる  
さよりたち

木蓮が  
頭上にあり  
て胸開く

春嵐腕相撲  
するギリシヤ人

ゴルバチョフと名付けて坂の春の犬

三月や人のきれいな膝小僧

空に蒔く種子です今日の揚雲雀

酒蔵の主人偏屈蓄時

酒蔵の端然とあり春の雨

えんどうの花のそばまで来ませんか

えんどうの花が風生むここ丹波

のれそれや四十にしてまだごんた

列島をかじる鮫たち桜咲く

春風の一族一党鱻食べる

タコ焼きの蛸の弾力花曇り

壺 堇 一 鉢 畝 傍 郵 便 局

猫おぼろ石もおぼろに明日香村

スケートのジャンプ連発桜咲く

子を肩に坂道登る虚子忌かな

家族みな靴の右減る花祭り

ふしだらに真昼の電車花曇り

桜散る河馬と河馬とが相寄りぬ

悪口をまあ仰山にさくら餅

自転車に翼ある日よたんぽぽよ

たんぽぽにたんぽぽ殺人事件聞く

全身にポケットあまた春の宵

行く春の黒猫の目にゆきあたる

Tシャツの四人家族や草の丘

葉桜の午前に開く『智恵子抄』

葉桜やあいつはボヤのような奴

二十年前の指切りハナミズキ

挨拶がつい繰り言に桜の実

おだまきや妻のきれいな昼の酒

遠方にけやきのみどり日曜日

歲月やふっくらとこの豆ごはん

一日の途中の牡丹・赤ん坊

日々流転さやえんどうの一盛りも

歲月の素肌のように柿若葉

目を閉じて見るべし聞くべし柿の花

若葉山べろっともそっとなの舌

汗をかくそら豆の莢さや日本も

愛はなお青くて痛くて桐の花

そら豆の青い莢まで行きましよう

猫もいる六月の木の見る夢に

男病むアジアを走る青い梅雨

走り梅雨なおふんばって仁王像

脱腸の話を友と菖蒲園

突然のウシガエル殿菖蒲園

菖蒲咲く老いてきれいな語尾訛り

採寸に体まかせる鉄線花

朝五時のひかりのままにこの薔薇は

青梅の下に一人の黒い傘

棟上げの柱の向こう麦熟れる

麦熟れる畦で腐敗の週刊誌

びわ 熟れる 古代の水の光りつつ

びわ は 水 人間も水 びわ 食べる

びわ 熟れる きんさんぎんさん 並んでる

やまもも や 人麻呂が来て 虫麻呂も

水張って 大阪の田に 空戻る

梅雨続くダツシユダツシユのオートバイ

大阪やぶくんぷくんと布袋草

炎天をちよろりとなめて青蜥蜴

猫の木のどれも舌出し六月は

大阪にふえる猫の木走り梅雨

猫の木がぶあぶあど立つ六月は

六月の木よ鈴なりの猫の耳

夫婦してくすぶっている梅熟れる

ざつくりと崖ざつくりと梅雨晴れ間

梅雨続く小錦十人いるような

ふるさとのジューンドロップ昭和逝く

白南風やポテトチップス手に乗せて

炎天や蔵へランプをとりに行く

好きやねん天神祭鱧の皮

神々も軽装好み蟬の朝

炎天へ足垂れている黄金蜘蛛

炎天のわれも一樹となっっている

夕風や原子炉に似てわが肝胆

シャンプーの朝の泡立ち雲の峰

公園の朝の落書き花火屑

睡蓮に誰もが遠くなるまなざし

睡蓮へまっすぐに行くあの人は

睡蓮や若いも若きも腰おろす

緑陰に鳥が大きくいる午前

東大寺門前一匹ひきがえる

ア  
パ  
ー  
ト  
の  
明  
か  
り  
い  
ろ  
い  
ろ  
墓

日  
が  
さ  
し  
て  
昼  
寝  
の  
妻  
の  
土  
踏  
ま  
ず

百  
日  
草  
が  
ん  
こ  
で  
知  
れ  
る  
父  
と  
母

楠  
の  
木  
の  
下  
に  
住  
み  
つ  
き  
明  
易  
し

木  
の  
下  
の  
あ  
い  
つ、  
あ  
い  
つ  
の  
汗  
が  
好  
き

そうめんともう決めている青田道

青田道でっかい顔の男来る

下京の仁王の肩の瑠璃蜥蜴

風鈴や午後にはじまる母の愚痴

阿修羅あり松葉牡丹の道を来て

夢 違 観 音 ま で の 油 照 り

今 は 昔 の 炎 天 牛 窓 本 蓮 寺

炎 天 に 山 あ り 山 の 名 を 知 ら ず

裏 山 が す ぐ そ ば に 来 る 盆 休 み

膝 に 乗 る 黒 猫 の 愚 図 夜 の 秋

やわらかに土踏まずあり九月来る

小錦のだぶだぶと行く残暑かな

秋暑してらてらといる招き猫

木の股に二百十日の西日かな

山々が近づいている子規忌かな

二つ目の坂下りつつ月の中

月の村脱腸の人いるような

秋日和わが尾の伸びているような

露草の露の目をしてこの犬は

露散らす金満にして脱腸氏

ドストエフスキーの匂い無花果は

この南瓜不倫なんぞを気にしない

糸瓜咲く大きくなるのは耳ばかり

この石榴ブルートレインだったのよ

神戸まで行く気かしらんこの石榴

気に入りは中年そして長十郎

このごろは肥満怠慢長十郎

卓上の長十郎とは横着な

長安の夢の一滴この梨は

おのおのがおのが影踏み秋の豚

柿たわわあの野郎まだ健在に

ともかくもナンバングセルまで戻る

コスモスの角を曲がればなんでも屋

大阪をすこし離れて赤まんま

法隆寺までのこの道赤まんま

柿色に柿はなりつつ法隆寺

夢殿を出て八方の秋日和

秋の日の寸胴の壺父の壺

いわし雲阿修羅像まで行くつもり

火の山の麓なるらし秋の薔薇

秋の昼輪ゴム二、三に用もなし

鶏頭や東アジアに生きて死ぬ

丹波路の一期は夢の葉鶏頭

子規忌から芭蕉忌までを葉鶏頭

空中に碇泊しつつかりんの実

無口にて傷痕あまたかりんの実

東寺まで行く気石榴を食べながら

ふまじめもまじめも裾にいのこずち

ぬかごまで来たる夫婦の二十年

秋晴れや野仏みんな耳を欠く

弟がたいてい利発柿の家

山麓の百年の家 銀木屋

秋霖やふと声かけて用もなし

秋の雨 秋篠寺を出る二人

はきはきとした人という秋の雨

秋日和めし粒二、三も余さずに

おおいなるわがにぎりめし秋の山

柿抱いてワコール本社ボイラーマン

体内のどこかが澄んで紅葉山

まさにこれ山の顔してやまいもは

野分吹く大きな鼻の人といて

野分吹く漱石伝の妻いびり

すすきからたわしへ戻る秋日和

某の木が某の木を呼ぶ秋の暮

漱石の散歩どこまでぬかごまで

首冷える庭先になる茄子たちも

新米が届く落ち葉も二、三枚

大木の影がさびしい十月は

秋蠅も二、三が渡る墨田川

南瓜は松下村塾かもしれず

T U G U M I まで行く恋人の影踏んで

秋の虹オバタリアンの木をつなぐ

喪の家の櫓がためる露の玉

ひよどりのもつともそばに伊勢の人

風は秋江戸川乱歩傑作集

昔々の十月の夢丹波壺

ブルームーンという薔薇へ行く十月は

椎の実のまだ青い日の立志伝

誰彼のうわさ楽しむ秋の薔薇

ひよどりのひよつと来ている大阪に

どこも秋福助足袋はありますか

柿たわわ妊婦一行通りゆく

秋日和かがとの皮を削りつつ

城跡に石のみ秋の雨ばかり

全身にひびあり秋の木馬かな

先生へ桜紅葉を二、三枚

柿たわわけんけんばあの一人っ子

石屋ありまた石屋あり秋の村

紅葉散る恋人が今来たような

岩に露文化こぼれているような

柿たわわきれいな嘘があるような

中年の声はきはきと秋日和

愚痴もまた夢につらなり鱚雲

晩秋の木が木を呼んでいるような

秋の雪弥勒菩薩へ行く途中

落葉踏む捻挫も悲恋もいるような

落葉踏む昨日の秘密踏むような

先生の家このあたりお茶の花

ふっくらと落葉の道に先生は

冬日和ふわっと猫が六匹に

誰もかも土くさくなくなり小春かな

木の傷も小春日和や中学校

小春日や河馬に涙の湧くような

日がさして濡れ落葉いま日の器

城崎のこの山茶花に来たような

城崎や時雨数粒裏窓に

猪<sup>じ</sup>食<sup>じ</sup>べに男<sup>お</sup>らが行くハイウエー

真昼間の鱧食<sup>く</sup>べている石<sup>い</sup>蓆<sup>し</sup>の花

青空が霰<sup>あられ</sup>をこぼす明日香村

文鳥の籠<sup>かご</sup>吊<sup>つり</sup>り雪<sup>ゆき</sup>の京都<sup>きょうと</sup>かな

文鳥や霰二、三をついばんで

てのひらに霰を三粒恋人は

恋人の髪をそのままに

霰来るカバンの底に正露丸

十二月脇のほころびいつのまに

大木に傷痕無数十二月

ぽかぽかの十二月にて奴死んだ

先輩になまこたまわる十二月

どの路地も海に通じて十二月

眼鏡屋を出て五、六歩の枯野かな

はにかむもしりごむもよし枇杷の花

花 八手 観音堂の裏に来て

枝 雀 いて 扇 雀 も いる 寒 雀

猫 去って また猫が来る 風邪ご ち

寒 いだ なんて 言わないで おこ牡丹雪

風花や中森明菜的埴輪

牡丹雪平安京の木の股に

あ  
の  
木  
で  
す  
ア  
メ  
リ  
カ  
牡  
丹  
雪  
協  
会

牡  
丹  
雪  
ホ  
ー  
ム  
ル  
ー  
ム  
は  
論  
争  
中

ド  
ー  
ナ  
ツ  
の  
穴  
が  
好  
き  
で  
す  
牡  
丹  
雪

竹波忌や天心に湧く牡丹雪

羅生門過ぎて南へ葱畑

寒波去る耳のほてりの火種ほど

枯芝を五、六歩踏んでソクラテス

わいわいもぶらぶらも来る冬の波止

男来て四月の雑木ぶつたぎる  
『人麻呂の手紙』

種かめば昨日のみどり色でした

百代の過客の犬とひなたぼこ

探梅や嘘つきごろつき狐つき

水仙をひと抱えしてひと揺すり

阿蘇下る二月の闇を胸で押し

少年がもたれ二月の桜の木

肩口に二月のひかり阿修羅像

立春の大屋根の雪万福寺

梅咲くや天心にいる母と叔母

椅子ひとつくすぶっている焚き火かな

牡丹雪ペンギンがする跳ぶしぐさ

日本の春はあけぼの犬の糞

よもぎ餅途中で買うて古墳まで

花菜漬恋しい人が四、五人は

朝寝して耳のきれいな人のそば

三月の土を落としてこんばんは

春霞木馬の目玉ありし穴

友とあり伊予のタルトは春の菓子

三月の松林なりキスをせん

十代がひよいひよいまたぐ蛇苺

奈良にあり鹿も我らも緑雨かな

茄子苗の一本を手に乗せて買う

青梅雨や松江の友が来つつあり

土佐に来て鉄砲百合の家に来て

柿若葉カミさんと地図買いに出て

炎天を来てかたばみの花へまづ

大阪に頑固に住んで百日草

恋人とポンドンダリアまでの道

白南風や午前にちよつとキスをして

オカリナを吹く皇子たちよ睡蓮は

胸がふと穴である日のさわやかに

東京の秋の真昼の穴を跳ぶ

さよならと穴からの声秋の声

十月の薔薇ランボーの腐乱体

老犬をまたいで外へお正月  
『ほほのあたり』抄

火傷して冬の桜の幹叩く

立春の翌日にして大股に

河馬までの冬の日踏んで恋人は

正面に河馬の尻あり冬日和

冬の日 尻を並べて 河馬夫婦

ぶつかって離れて 河馬の十二月

岩に置く顎岩になり 冬の河馬

梅の丘祖父以下一族 端正に

えんどうの花に泊まって来たと言う

白鳥のいたはず春の水平ら

桜咲く幹のうつろに日がさして

桜散る空ばかり見て銅像は

桜散るでんぐりがえりのあとはさて

桜散るちよつと舌出す癖が好き

春の夜の八メートルの腸動く

本題をそれてばかり春の宵

一日の遠方になり桐の花

手にのせてこれは京都のかたつむり

なめくじのへの三匹が同じ向き

象印ポットの口が薔薇のそば

枇杷抱いて老人一人市内バス

睡蓮へちよつと寄りましょキスしましょ

睡蓮や十年前の日が射して

奈良へ行く緑雨に肩を寄せ合うて

法隆寺までの緑雨を大股に

手紙書く奈良の緑雨の昼さがり

黒南風のべろのべろべろ大阪は

野茨の刺の緑を手渡さる

梅雨晴れの穴子井までおいで

空蟬を手にのせて行く法隆寺

魂の半分は鬼花火散る

水運ぶ人のゆらゆら百日紅

露草を愛する人と露の中

ごろごろのかぼちやにたまる夕日かな

父と子とかぼちや抱えて月の中

熊本のうちむらさきは胸に抱く

つぶつぶのジュースをごくん屋根の上

ひまわりの三本までは、まあ許す

ちよこと行くちよこちよこと行く蜥蜴まで

炎天やぐちやつと河馬がおりまして

百日草ハルマゲドンはいつですか

頬杖の二人、三人 晩夏光

N 夫人ふわりと夏の脚を組む

ぐちやつと父ぺちやつと母の秋日和

寝転んで枯れ野の鰐になりました

? が ? を 呼ぶ 冬 木 立

天窓に正月の星二、三粒

根を空に深く張る木々お正月

立春や心にちよんと鬼がいて

ああ顎が目覚めているよ春の河馬

東風吹かばちりめんじゃこの別れかな

貯水池の桜三分へ来て一人

七月の夕風キリンの卵から

こがね虫ぶつかる壁の日本地図

コンセント抜けかけたまま鳥渡る

間氷期からの風来るけやき散る

セーターの草色選び十二月

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ

朝九時のすずめのえんどう下さいな

道それて葍つなぎをきゅつと抜く

こんもりと百年があり野ばら咲く

白蓮の蕾に触れたなんてバカ！

邪馬台国生まれの露と露草と

数学の定理はきれいな露草も

十月の椋も榎も見上げる木

月光の折れる音蓮の枯れる音

羅生門跡の霰の跳びはねて  
『月光の音』抄

一羽いて雲雀の空になっっている

春暁の君は帆船帆を開く

空海も雲雀の一羽本日は

豆の花遣唐使船いるような

空へ散る音の光つて山桜

春宵の鹿兒島県人長四角

春月の愛媛県人楢円形

石斧の音のこぼれる春の闇

恐竜のすわった跡か春の闇

桜散る男はことに座礁して

海棠の蕾に今日は来たような

世界との距離か白バラまで数歩

膝抱けば錨のかたち枇杷熟れる

寝そべって立夏の犬というかたち

寝そべって立夏の人というかたち

炎天の男錨の匂いして

秋九月樹霊もわれもあぐらして

秋の蚊の目玉がなぜか重くつて

ころがして二百十日の赤ん坊

ねこじゃらし大山あかねさんが行く

てのひらの匂い雲雀の巢の匂い

てのひらにかたつむりのせ市内バス

どこからかはみ出たばかりかたつむり

麦秋の自ら濡れている蛇口

口あけて全国の河馬桜咲く

全国の河馬がごろりと桜散る

八月のナガサキアゲハ尾行せよ

恋人も河馬も晩夏の腰おろし

横ずわりして水中の秋の河馬

なっちゃんもてっちゃんも河馬秋晴れて

水澄んで河馬のお尻の丸く浮く

秋晴れてごろんと河馬のお尻あり

波音が月光の音一人旅

月光の草むらに置くわが眼鏡

ふわふわの闇ふくろうのすわる闇

一日のどこにも桜とハイヒール

ころがって海辺の老人桜散る

木から木へ少年わたり晩夏光

本日の家族は二人栗ごはん

ふくろうを兄貴と呼ぼう夜の時雨

サーバーはきつと野茨風が立つ

ネム咲いてカンパネルラも来ているか



発行 二〇〇七年九月一日 初版発行

著者 坪内稔典 ©Toshinori Tsubouchi

発行者 山岡喜美子

発行所 ふらんす堂

〒182-0002 東京都調布市仙川町二ノ九ノ六一ノ一〇二

現代俳句文庫 坪内稔典句集Ⅱ

ホームページ <http://furansudo.com/> E-mail [fragile@apple.inet.or.jp](mailto:fragile@apple.inet.or.jp)

TEL (〇三) 三三三二六一九〇六一 FAX (〇三) 三三三二六一六九一九

振替 〇〇一七〇一―一八四一七三

フォト・イラスト 武内理能

印刷所 (株)トヨース社 データ制作 (株)光スタジオ

製本所 (有)並木製本